

くらしナビ カルチャー

ダイニングキッチン生みの親 大阪で企画展

西山卯三の仕事

庶民に寄り添い「住」を革新

「ダイニングキッチンの生みの親」といわれ、戦前からいち早く庶民の暮らしの研究に取り組んだ建築学者、西山卯三(1911~94年)。優れた観察眼と画力で調査を重ねた西山の「記録への意志」に光を当てた展覧会が、大阪市北区のリクシルギャラリーで開催中だ。一貫して生活者の視点に立ち続けた西山の仕事は何を伝えるのか。意義を探った。【清水有香】

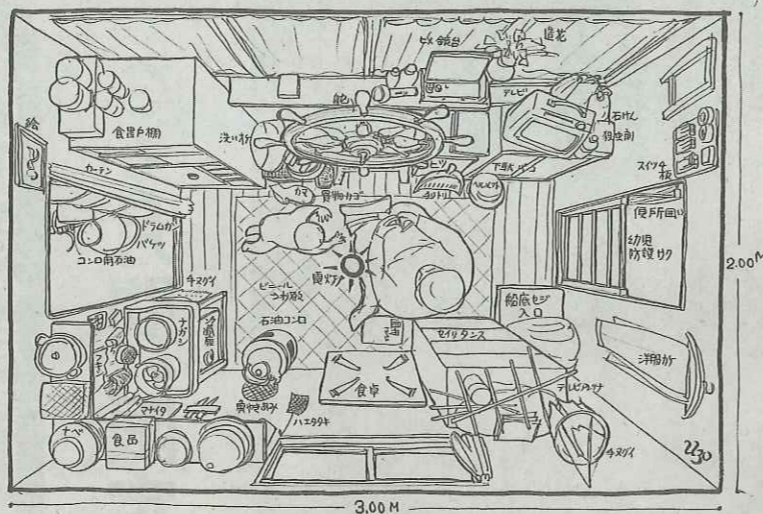
味のあるタッチで細部まで描き込まれたイラストの数々。「超絶記録―西山卯三のすまい採集帖」と題された本展には、西山が残した住宅図版やスケッチなど約90点が並ぶ。40〜60年代を中心に調査された町家や農家、公団アパートなど26項目の住まいの間取りは主に俯瞰図で

院時の病室の間取りまで描いた。「研究者として学んだのはまづ現状をよく知ること。そこからどう問題の核心を見いだし、解決を示すのかを考えると書かれた」と住田さんは振り返る。

西山は大阪・西九条の鉄工所

示されている。「調査旅行した時、窓の格子を数えておられた。とにかく正確です」。57年から5年間、西山に師事した住田昌二・大阪市立大名養教授(83)は語る。家財道具や生活用品も描かれ、人々の息づかいが伝わる。戦後の住宅不足から生まれたバス・電車住宅、九州や北海道の炭鉱住宅など、劣悪な住環境も克明に写し取られている。西山は自らの住まいも記録し、入

の三男に生まれた。工場と長屋が密集する下町が研究の原風景だった。京都大大学院在学中の35年、邸宅研究に比べて手つかずだった庶民住宅の調査を開始。大阪・名古屋・京都の町家約3600戸を調べ、小さな家でも食事の場と寝室を分けている実態に気付いた。そこで41年に発表したのが「食糧分離論」だ。戦時下で軍需工場の労働者向けに大量の住宅が求められてい



舟の甲板に設けられた居住空間を描いた西山卯三のスケッチ。西山は10万枚以上の写真も残し、うち約1万5000枚が記念文庫でデータベース化された。写真は京都市電の廃車を利用した市営の電車住宅(1957年撮影)。(NPO法人西山卯三記念すまい・まちづくり文庫提供)

町家やアパート実地調査 細密スケッチ

た時代。当時は一つの和室を食事にも就寝にも使う転用論が住宅の基準だった」と住田さん。どんなに狭くても人間らしい最低限の生活の「型」を提案する食糧分離論は「庶民の暮らしに即した画期的な論でした」。この主張は50年代に「DK型間取り」として公団団地に採用され、民間の集合住宅にも普及した。高度経済成長の波に乗り、団地やニュータウンが次々と建設された60年代を経て、73年の統計調査では住宅戸数が世帯数を初めて追いついた。その後、「量的供給から質的向上へ住宅への考えは転換した。同じころ西山は大学を退き、古都の景観や街並み保存運動に関わるようになった。町家など伝統様式の住宅を「生活者の知恵の蓄積」と捉え、守るべき文化財だと訴えた。21世紀の今は住宅が余る時代だ。喫緊の課題は空き家問題。新築中心の考えを既存住宅の改善やリノベーションへと向ける必要がある。価値のある住宅は生かせと西山先生も言うと思います」と住田さんは語る。

劣悪な環境も可視化「人間らしさ」追究

さらに倉方さんが注目するのは、西山が60年代に唱えた「開発的保存」だ。文化財や景観を破壊する乱開発のあり方に対し、「国民に支持された創造的な計画をもった開発」によって「前向きに生かして残すべきだ」と訴えた。「市民が主体的に価値を見つげるための場や手段を用意するのが専門家の仕事である」という考えは今も有効。世の中に埋もれている問題があるとしたらそれは何かを問う強靱さが、西山の生涯には流れている」と倉方さんは指摘する。展覧会は22日まで。12〜16日、水曜休み。リクシルギャラリー(06・67333・1790)。

残した資料数十万点 NPOが整理し公開

本展に資料を提供しているのが、今年開設20年を迎えたNPO法人「西山卯三記念すまい・まちづくり文庫」(京都府木津川市)だ。西山の没後、自宅に残されていた数十万点の資料を整理・公開している。図書室のような空間に、「戦災者応急住宅調査原票」などと分類された資料ボックス約650個、住まいや旅先の食べ物を書き留めたスケッチブック約120冊などが並ぶ。「日記、日誌、日録と書き分けられた日々の記録や大量の手紙もあります」と、記念文庫副理事長の中林浩・神戸松蔭女子学院大教授(63)。西山の記録魔ぶりがうかがえる。中林さんは京都大で西山の授業を受けた最後の学生だ。74年の師の退官後、20年にわたってまちづくり運動に同行。没後間もなく、仲間と約5年かけて資料整理に汗を流した。圧倒的な調査量を前に、「それに照らして研究者として自分はどうかと考えさせられます」と話す。館所蔵の資料名は記念文庫のホームページ(<http://www.n-bunko.org/>)で検索できる。開館日は木・土曜の午後1〜5時(祝日は休館)。利用の際はメール(npo@n-bunko.org)で事前連絡が必要。電話(0774・73・5701)。

担任のひと言に消えぬ傷

20年前のことです。国語の物語の感想発表の場で司会をしました。授業の終盤、担任にクラス全員の前で「昨日休んでいた子ばかり先に指し、意地悪だ」と言われました。私はその子ばかり先に指していません。その時は頭が真っ白になり、クラスメートの反応さえ思い出せません。今でも「私は意地悪なの？」と考えてしまいます。人と関わるのが怖いときもあります。どう振舞えば良いのでしょうか? (32歳・女性)

人生相談

渡辺えり



小学校6年の時に黒板に漢字をうっかり間違えて書き、担任から「知ったかぶりして調子に乗るからだ」と言われ、金づちで頭をたたかれたような思いをしたことがあります。目の敵にされ、私だけがよくしかられました。いじめにも遭い、尿が出なくなると診察を受けましたが異常なし。ストレス

だど医師に言われました。みんな思う相手に厳しくなる。あなたもそうだと思う。あなたもあなたにこだわりの。先生はあなたにこだわりの、落ち度を探して攻撃し、安心したかった。しかし、あなたはけっして何も悪くはありません。級友たちはあなたが意地悪などとは思っていません。先生も思っていないのに、あなたに嫌なことを言っていたのだから。私は私を目的にしたい。いじめた先生を「ねずみ男」の役に書き、その時やっと思いの役に変えることができました。あなたには苦しいです。(劇作家・女優)

渡辺えりさんに、悩みごとを相談してみませんか。郵便は、〒100-8051(住所不要)毎日新聞くらしナビ火曜「人生相談」係へ。メール(kurashi@mainichi.co.jp)でも受け付けます。電話番号など連絡先も明記してください。一次回の渡辺さんは22日掲載